

続・吉田宗恂とその周辺 ―コンピュータと図書館を活用して―

時慶記のキリシタン（番外編）

天下一について

島野達雄

「天下一の称号」は、元龜 2 年（1573）に織田信長が取得を奨励する以前から、京都の諸職・工人の中に名乗る者がいた。天和 2 年（1682）に五代將軍徳川綱吉が「天下一」の禁止令を發布したが、それ以後も「天下一」を名乗る職人たちがいた。ここでは、五つの基本文献から、「天下一を名乗った人々」を拾い出すとともに、基本文献からもれている、江戸初期の「割算の天下一・毛利重能」および同時代に日本に滞在した二人の外国人の著作、イエズス会のジョアン・ロドリゲス『日本教会史』と朝鮮儒者の姜沆『看羊録』に見える「天下一」を紹介したい。

1. 割算の天下一・毛利重能 割算書 ⇒国書データベース（国書 DB）

右作直悉改しは攝津國武庫郡瓦林住人、今京都に住む。割算の天下一と号者也。

元和八年（1622）初春日 （毛利）重能（丸印）（角印）（割算書（割算ともいう））・巻末刊記）

2. 「天下一」の基本文献 ⇒Cinii Research, 国会図書館デジタルコレクション（国会 DC）

- ①横井時冬『大日本実業学会普通商科講義録・日本商業歴史』1885?第 12 章（⇒国会 DC）
- ②桑田忠親「天下一の号」1956 国学院雑誌 57（7）（⇒Cinii「天下一の号」で検索）
- ③米原正義「天下一の意識と天下一の号」1971 国学院大学紀要（9）（⇒上に同じ）
- ④立部紀夫「「天下一」の称号と看板に関する一考察」2000 日本デザイン学会（⇒Cinii「「天下一」の称号」で検索）
- ⑤青木豊『和鏡の文化史―水鑑から魔鏡まで―』1992 刀水書房（⇒大阪市立中央図書館など）

3. 信長の奨励 当代記・信長記・信長公記⇒国書 DB, 翻刻⇒大阪市立中央図書館（大市図）など

元龜 4 年（1573）7 月、信長は「上京炎上不便思給、可還住之旨曰、被下條目書」として、京都奉行（所司代）村井長門守貞勝あての定め書きで、

天下一號を取者、何の道にても大切なる事也、但京中諸名人として内評議有て可相定事（松平忠明?『当代記』巻一）（②桑田忠親は、この定め書きは『信長記』にあり、『信長公記』にはないとするが、ジョアン・ロドリゲス『日本教会史』の土井忠夫訳注は『信長公記』巻六にこの定め書きがあるとす。そもそも『当代記』を偽文書とする研究者がいることを③米原正義が指摘している。）

と「天下一」の称号を奨励した。

その後、鏡屋宗白が村井貞勝を通じて天下一の鏡を進上した時、信長は「以前にも天下一の鏡があった」と村井を叱り、自らの不明を嘆いた（小瀬甫庵『信長記』の「鏡屋天下一号之事」）。

①横井時冬は、この宗白の一件のほか、秀吉時代の天下一の工人として、陶器師・樂吉左衛門常慶／蒔絵師・法橋幸阿弥長清／塗師・盛阿弥紹甫／土風廬師・西村宗次郎／鏡師・木瀬浄阿弥／面打・是閑吉満／挽物師・左近をあげている。

4. 天下一の史料 桑田忠親の論文「天下一の号」⇒Cinii Research 各史料は⇒国書 DB など（巻末付録を参照）

- ②桑田忠親は、史料を明示して、数多くの例を示している。

紹鷗時代、京都天下一**西村道仁**（釜師由緒書・信長公御釜師）／文禄二年癸巳五月吉日天下一**道仁**作（羽前国羽黒山麓の橋の擬宝珠銘）／慶長十年鑄師洛陽三条住天下一**沙弥道仁**（京都烏丸六角通西六角堂・旧鐘銘）／慶長十一年丙午秋時正中日三条住人天下一**道仁**（京都寺内大宮東・妙蓮寺鉄燈籠銘）。

茶の湯関係では、この他に、京之天下一**大郎五郎**（津田宗及茶湯日記・天正 10.3.22 条）／京師天下一（辻）**与次郎**（釜師由緒書）／慶長五庚子年八月十八日、天下一釜大工**与次郎実久**鑄之（京都豊国神社前北方の雲龍燈籠銘）／山城国愛宕郡三条釜座鑄物師天下一**辻与次郎藤原実久**（山羽国秋田西善寺の銅鐘銘）／天下一ちやわんやき**吉左衛門**（楽家文書・町長門守吉高伝馬催促状・文禄元年 11.21）。

秀吉時代の天下一と称された工人は、鏡作りでは天下一**富多**（秀吉の側室お種殿愛用の銀鏡の背面）／天下一**木瀬浄阿弥**作（京都北野天満宮・秀頼奉納の鏡三十二面、清正奉納の鏡一面の背面）／面打ちでは、「大野出目大光坊弟子、**是閑吉備**、焼印撫角に天下一**是閑と有**」（面目利書）／豊職人では天下一**豊刺**（玄以法印下知状写・天正 11 年頃）／天下一の**仏廻し**（人形つかい）（家忠日記・天正 15.7.10 条）／天下一の**堤**という神人（かみひと）（輯古帖・秀吉朱印状）をあげている。

千利休が天下一と称された典拠として、「易（宗易=千利休）よりは御道具数々給候、於京都茶湯之道をこそあげ申候、外実此事候々、彼（千利休）手前見せ申候、とてもとても天下一とはさてこそ申候へと存候事まで候、中々絶言語候」（肥前有浦文書・有浦大和守宛何某書状）を示す。

美女の天下一は、服部如実『僧房綺談』1936（⇒国会 DC）が「於京都三条**センベヤ与助娘**藤様、天下第一美人也、…天正十四口十月吉日」という戯書を紹介しているという。

天下一の名品では、秀吉自筆の消息に、茶入れを「此なりよし、一だんおもしろくおぼしめし候て、ひぞ（秘蔵）にて候へども、其方ひさびさわずすきにて候まま、つかわされ候、にほん物にをいては天下一のちやいれにて候、ひぞあるべく候」とある。

信長時代では、「天下一の腰物地蔵信国」と「野坂文書」（⇒国立歴史民俗博物館）にあるほか、四十石という銘の葉茶壺を「松島・三日月滅して後、天下一の壺也」／井戸茶碗では「是天下一の高麗茶碗」／元代の虚堂禅師の墨蹟を「本は幾嶋所持す。天下一名物也」／蕪無（かぶらなし）の花入を「青磁茶碗の手本は引拙、其次紹鷗、名人へ代々渡り、天下一花入也」／桃尻の花入を「本は珠光所持也。但古銅花入、天下一名物」／新田肩衝（かたつき）を「珠光所持す。天下一也」／似たり茄子（なす）を「形ち、コロ、土薬トモニ天下一ナリ。珠光褒美の名物也」と『山上宗二記』（⇒国書 DB）に書いてあるとのこと。

山上宗二の茶書に、五徳づくり（鑄掛）が、「奈良の天下一**休意**に有」（茶器名物集）、「奈良（良）天下一**休三**にあり」（酒井本山上宗二記）、「奈良天下一**久怡**」（瓢庵宗二伝書）と奈良で盛んであったことを③米原正義が指摘している。

5. 天下一の意識

③米原正義は、「彼ら（信長・秀吉）の天下に対する強烈な意識は、転換期の歴史舞台に即した時代の思潮となりうるものであった」とし、「天下一」にかぎらず、「天下第一」「名人」「天下無双」などの語句を含めて、時代とともに権力者や民衆の意識がどのように変化したかを明らかにしている。

むろん曾我物語・義経記・吾妻鏡などの日本文学に見える「天下（第）一」を数多く示し、
②桑田忠親の論考と用例を大幅に補強している。

13世紀の成立と見られる『延慶本平家物語』には、「吾こそ天下一の名僧よ」「天下一番に貧しからむ僧」「天下第一の女」などの用例があるという。

天下一に限定すると、「仲頼は、天下一の三の宮、婿とり給へど、とられず」（宇津保物語・嵯峨院）、「天下一の馬乗」「天下一之大剛の者」（西源院本太平記）／「天下一の美人」（幸若舞曲集・大臣）／「天下一与一」（多聞院日記・天正6（1578）1.23条）／「天下一与三郎」（多聞院日記・弘治1（1555）12.29条、永禄10（1567）7.12条）／「ぬし（塗師）天下一藤左衛門」（宗及茶湯日記・自会記・永禄2（1559）10.23）／「いかげ（鑄掛）の天下一南都の久怡（弥左衛門）」（宗及茶湯日記・自会記・天正11（1583）11.25）などがあがっている。

千利休（宗易）については「茶湯之天下一宗易」と、「石母田安房守景頼宛の鈴木新兵衛書状」（伊達家文書二 587 天正 19.2.29）にあることを見出している。茶の湯では利休よりも早く村田宗珠が「当時数寄之上手，天下一之者也」（鷲尾隆康の二水記・享禄4（1531）1.12条）と呼ばれていた。「もともと芸道界では，一道に秀でている場合に天下一と評することはほとんどなく，前に述べた金春氏信（禅竹）が「天下第一之上手」といわれたのはむしろ例外に属し，他は上手，名人，聖，達者，達人，堪能，先達，好士，最要，鏡，明鏡，灯火，中興などと形容され，ごくまれに日本一とか天下無双の語が見える」とも指摘している。

6. 絵画資料・認定記録 ⇒国書DB, ⇒翻刻・語句索引は国会DC, 大市図など

④立部紀夫は，①②③などに依拠しつつも、先行文献に見られない多数の用例をあげ、ジョアン・ロドリゲス著の『日本教会史』，および「天下一」の絵画資料を独自に示している。

④立部紀夫の指摘には，「天下一の剛の者とは是をぞ誠にいふべきと」（『太平記』巻34 平石城軍事）／「ふるい天下一に之を申付」（多聞院日記・天正7（1579）8.19）／「天下一ノコト也」「天下一ノヨキ肴也」（『中華若木詩抄』⇒国書DB. ※抄文は江戸期か）などのほか，御所の女官によって書き継がれた『御湯殿の上（うえ）の日記』（文禄4.1.12条，慶長4.1.25条）の「天下一」の語句，また多数の受領号（国守名）・掾（じょう）号の認定記録がある。

「筆師すれう（受領）申，大和の大掾，御禮筆進上」（延宝5（1677）12.24）／「鏡師さつま（薩摩）の掾すれう（受領）申，御禮に御鏡三面進上す」（延宝7（1679）7.12）／「なら（奈良）のすみし（墨師）ひこの大せう（掾）すみ，白かね二十両しん上」（天和元年（1681）11.26）／「菓子師すれう申シ，越前大掾になし下さるる，御れい御わし進上す」（天和2（1682）2.20）。

「大日本水産会報告」（17）1883（⇒国会DC）に，壺塩屋慶太郎が承応3年（1654）「女院御所より天下一の号を時の奉行石河（石川）氏に命じて賜る」とあることから，天皇家や公家がこのような認定におこない，謝礼を受け取っていたようである。

日本デザイン学会で発表された④立部紀夫は，『洛中洛外図』脇村本（⇒和歌山県立近代美術館所蔵？）に見える「天下一の看板」，『京雀跡追』（⇒国書DB, 京都大学図書館蔵）に見える「天下一の看板」と「天下一の暖簾」の絵を写真で紹介しているのが大きな特長である。

7. 鏡師の天下一号と守名乗り

⑤青木豊は鏡師の守(かみ)名乗りに関する歴史を明らかにしている。

「この天下一の称号は、鏡師に留まらず、塗師・釜師・陶師・能面打師・筆墨硯師などの各種工人集団の中の一人に与えられた称号であったが、鏡師においても各工人が自分勝手に使用するようになり、何人もの天下一を生む結果となった。…江戸時代前期には、それらはより頻繁になり、天下一佐渡・天下一若狭・天下一但馬・天一出雲守・天下一薩摩守といったように、鏡師全員がといっても過言ではないほど「天下一」を使用する結果となった。」『時慶記』(⇒大市図)にも「天下一鏡屋」の記事がある。

天下一鏡屋参、於殿上磨ノコウ、従太閤去(一字分空白あり)日ニ御進上、三尺ワタリ在之、四之内也、一ハ大坂、一ハ聚楽、一ハ名護屋ニ在之ト、又従名護屋民部卿法印[前田玄以]折紙者十一日付、今日到来、従大明国勅使(沈惟敬が手配した謝用梓と徐一貫)、一両日中ニ可着日本、其後又日本ヨリモ勅使ヲ可被遣御用意ト被申(文禄2(1593)5.21)

8. 天下一の禁止 京都町触集成別巻2⇒大市図など

①横井時冬は、「徳川時代、甚だしきは招牌(看板)に天下一の号を彫刻して掲ぐる。ここにおいて天和二年(1682)、天下一の号を用いることを禁ず」と、五代將軍綱吉が天和二年に発出した禁令を紹介している。

天和2年(1682)天下一の使用禁止令・7月21日覚書。

覚. 諸職人天下一号之事可致停止旨、今度被仰出候間、自今以後右之趣堅可相守之旨急度可相触者也。天和二年(1682)七月廿一日 町代(京都町触集成別巻2・塩屋町文書)

二日後の7月23日付けの「覚」では、天下一の銘を削り取るよう指示している。

覚. 諸職人天下一号之事可停止之旨被仰出候間、急度相守之、天下一号鏡墨筆諸色鑑板(看板)暖簾等引之勿論、只今迄持来天下一銘有之道具悉可削之者也。戊の七月廿三日 上京町代(京都町触集成別巻2・塩屋町文書)。

この7月23日の禁令は、戸田茂睡『御当代記』(⇒国書DB)天和二年八月条が指摘しており、「諸人のいはく、天下一消、いまいましといふ」と伝えている。看板から「天下一」を消し去るよう命じるとともに、金銀の箔をつけた看板を焼却するよう命じており、一種の贅沢禁止令であったようである。

⑤青木豊は、「ところが、この「天下一」の使用禁止令の効力も長くは続かず、…江戸時代後期になると、作者銘は「天下一中島伊勢守藤原種定」「天下一橋本肥後守政幸」といったごとく、誇称・姓・守名・名乗を含めた、いかめしく長いものが好んで使用されるようになった」としている。

9. ジョアン・ロドリゲスが出会った天下一 日本教会史⇒大市図(貸出可)など

宣教師ジョアン・ロドリゲスがマカオで書いた『日本教会史』(上巻第33章第4節)は、同時代の外国人が見た筆作りの天下一と剣術の天下一を詳しく述べている。

往々にして、ある者たちは、自分たちを認めてくれるような者がいなくて、かかる者として自分で名乗り、天下一 **Temcaichi** (Tencaichi) を自称する。それは、この道にかけては国内で最も主要な者、頭 **Caxira**、すなわち頭領の意であり、もしも世襲で、同一の団体が多数あれば、団体または仲間の頭領の意味で、座頭 **Zagaxira** という。

これらの人々は自分の家の戸口に看板や表札を掲げるのが習慣となっていて、たとえば、書写用の毛筆を作ることで、全国で最もすぐれている者は、筆天下一 **Fude tencaichi** (訳注：京都御所に奉仕した小法師 (こぼし) という家) と書いておく。かかる人の中に、剣術 (エズグリーマ。兵法) の師匠も含まれるが、彼らはその道における第一人者からその名をとろうとして自信を持った者に立ち向かうのである。

天下 **Tença** (Tenca) の首都、都 **Miyaco** という宮都 (コルテ) では、門の入口のように、すべての人が行きかう都市の広場や公道や大通りに、次のように書いた立て札をたてる。

「某地の何某、日本国中、すなわち天下 **Tença** の剣術の達人、某通り、または某家に居住す。異議ある者、挑戦を希望し、木刀または真剣を以て試合したい者は申し込まれたい」。もしも、誰もそれを求めず、挑戦する者もなければ、天下 **Tença** の首都に、あえてそれを否定しようとする者がいないのであるから、確認されたことになる。

この剣術の達人は、②桑田忠親が「野坂文書」(⇒国立歴史民俗博物館)を典拠として紹介している、文禄5年(1596)に「天下一新陰流の兵法」と称した**蒔田義綱**(③米原正義は藤田義綱とする)かもしれない。

10. 姜沆が出会った天下一 古田織部・安国寺恵瓊・吉田宗恂・黄友賢

慶長の役で日本軍の捕虜となった朝鮮儒者の姜沆 (かんはん、きょうこう) は、抑留中に見聞きした「天下一」、とくに古田織部・安国寺恵瓊・吉田宗恂・黄友賢の四人について、虜囚の恨みからか、辛辣な評価を『看羊録』(東洋文庫・朴鐘鳴訳注)に書き残している。

倭の風俗では、あらゆる事がらや技術について、必ずある人を表立てて天下一とします。ひとたび天下一の手を経れば、それが甚だしく粗悪で、甚だしくつまらない物であっても、必ずたくさんのお金でこれを高く買い入れ、天下一の手を経なければ、甚だ精妙な物であっても、ものの数ではありません。木を縛り、壁を塗り、屋根をふくなどという、つまらない技にさえ、みな天下一があり、甚だしくは、着署 (署名)、表相 (表装?)、花押のようなものにまで天下一があつて、一度その鑑定を受け、一度じっくり見たということになれば、金銀三、四十錠をその価にあてます。

堀田 (古田) 織部なる者がいて、ことごとくに天下一を称しております。花や竹を植えつけたり、茶室をしつらえたりすれば、必ず黄金百錠を支払って、彼に一度鑑定を求めます。炭を盛る破 (や) れ瓢 (ひさご)、水汲み用の木桶 (きおけ) でも、もし織部がほめたとなれば、もうその価は論じることはありません。

このような習俗がすでに成立してしまっているのです、識者が時にはあざ笑ってみても、禁止することはできなくなっています。織部の家の富は、それ故、家康の富に擬 (なぞら

え)られるほどです。その他の天下一もみなこの類であります。

わが国の人は、日ごろ、倭賊は符術(まじない・符呪)をよくし、卜筮(ぼくぜい)をよくし、天文をよく観(み)、地理や人物を相(うらな)う、などといいます。しかし、よくよく調べてみたところ、そのいわゆる符術については絶えて聞いたこともなく、いわゆる卜筮は、ただ生まれた年月を『周易』のある卦(か)にあて、一卦中の卦・爻(こう)・象(たん)・象辞(しょうじ)を臆(うっ)し書きにして聞きに来た者に渡し、聞きに来た者は金銀で卜の代金を支払ってその吉凶を問う、すると(易者は)みなその中に書いてある、と答え、問うた者も、はあ、なるほど、と帰り、篋笥(きょうし、はこ)に大切にしまいこんで、ほかに泄(も)らしたりしない、といった程度のものであります。ただ、天下一が臆(うっ)しとって書いたものであれば、大層な礼金を得ますが、そのほかは、記録してあることが同じでも、得る礼金には格段の差があります。

天文・地理・人物を相(うらな)うというのは、昔から伝わったものではありません。安国寺(恵瓊)なる者がやや天文を解すると称していますが、それもやはり、でたらめな言辞で大衆の耳を惑わしているに過ぎません。

医僧の意安(吉田宗恂)が、日影台(日時計)と銅の渾儀(渾天儀)を作り、天地四方の遠近を測ったといいますが、それとても、天象を観測して人事を驗(けみ)するという点では、全然だめであります。

明朝の人、黄友賢などは、みな府学(明代の府に設けられた官立学校)の生員(学生)で、船に乗って倭京に到り、よく人を相(うらな)い、医術もよくし、推歩もよくする、と自称しました。倭人は、遂に彼を推して天下一としました。諸々の将倭らが、毎日のように輿や馬であい迎え、謝礼の金銀・錦帛は匱(はこ)や笥(ひつ)に充満するほどでしたから、夷の国である日本に十余年も居るようになり、とうとう西の自国に帰国することも忘れてしまいました。ただ単にその人が無法なばかりでなく、倭賊が愚かで、すぐ惑わされるものですから、実はこのようなことになったのであります。

姜沆は、『看羊録』では、吉田宗恂の天文や測量の知識を「全然だめであります」と批判しているが、吉田角倉家の測量術は、下浦康邦『吉田角倉家の研究』(平成11年近畿和算ゼミナール報告集3)所収の吉田宗恂校・吉田如見考「三尺求図数求路程求山高遠法」(天理大学附属天理図書館蔵)で、きわめて実践的なものであったことがうかがえる。

なお、姜沆は宗恂著の『歴代名医伝略』の序文では、医師・吉田宗恂を評して「その術を為(な)すこと、直(ただ)長桑・岐伯と一頭の地を数千百載の上に争う」と絶賛している。

薩摩の島津家に召し抱えられた明人・黄友賢と西洞院時慶との交際は、関ヶ原の合戦がおこった慶長5年(1600)の5月から9月までの『時慶記』が伝えている。

照高院[道澄]殿へ立寄申候処、非時給、信友モ御相伴也、大御酒アリ、友賢モ伺候申、平野作事日取ヲ申談シテ、注サセテ帰ル(慶長5.2.29)

又伏見へ友賢へ遣状、可有出京敷否ノ義ニ付也(慶長5.6.6)

烏丸[光宣]へ遣状、返事在之、就其儀テ伏見友賢へ遣喜蔵、今先弥右衛門尉へ遣状テ

友賢暇ノ事ヲ申遣候 (慶長 5.6.8)

伏見へ遣人, 友賢来儀, 命鑑 (三世相命鑑. 三世の因果・吉凶の書) 共ヲ尋候, 午刻此亭ニテ振舞, 烏丸 [光宣] ハ兼約ニテ無来儀, 晩ニ彼亭へ友賢同心シテ行, 振舞種々アリ, 命鑑被尋候, 其間碁アリ, 未休相伴ニ出, 夜ハ此亭へ又来, 泊 (慶長 5.6.9)

友賢心静ニ又明鑑 (三世相命鑑) □□取也談義ヲ聞, 卯歳ト未歳トニツ也 (慶長 5.6.10)
今先弥右衛門ヨリ先日返事到来, 又此方ヨリモ嶋津兵庫頭 [義弘]・龍伯 [嶋津義久]・友賢へ遣状, 平野ノ一義ニ依也 (慶長 5.9.13)

慶長 5 年 6 月 12 日条に「意庵へ礼状遣」とあり, 宗恂が「うらない」天下一の黄友賢を時慶に紹介したのではないかと想像できる. 時慶は『三世相命鑑』の不明な部分を友賢に尋ねることができたので, 宗恂に礼状を送ったのかもしれない. 9 月 13 日条の「平野の一義」は, 2 月 29 日条の「平野作事日取」に (黄友賢が付けた?) 「注」のことであろうか.

なお, 時慶は天正年間から島津義久・義弘と交際している.

90 年代に近畿和算ゼミナールで活躍した下浦康邦は, どちらも「天下一」と呼ばれたことから, 『割算書』の毛利重能は黄友賢ではないか, という仮説を提唱した (『平山謙博士 長寿記念文集』1996). 黄友賢 (1538-1610) の伝記は『薩南叢書・第四編』(⇒国会 DC) にある.

毛利重能には, 「摂津国武庫郡瓦林から京都に移り住んだ」(『割算書』巻末刊記), 「池田輝政公の封国の郡吏だった」(角倉源流系図稿・吉田光由条), 「明に渡航した」(白石長忠の『数家人名誌』1824, 明治 11 年文部省発行の『文芸類纂』), 「吉田光由・今村知商・高原吉種の三人の弟子を育てた」「大坂の陣のあと, 江戸で浪人となつたらしい」(松永良弼の「荒木先生茶談」) などとする史料があり, 子孫を含めて島津家の庇護を受け, 詳細な経歴が明らかな黄友賢には比定しがたい.

【付録 1】無料で史料や文献 (論文・書籍) が調べられるネット上のデータベース

- ・国書データベース (国文学研究資料館) 国書 (和算書を含む) の統合データベース 2023.3.1 稼働
- ・国会図書館デジタルコレクション 明治大正昭和の文献等約 247 万点が全文検索可能 2022.12.21 稼働
- ・おおさか e コレクション (大阪府立図書館) 中之島図書館の古典籍など 2024.1.12 リニューアル
- ・Cinii Research (国立情報学研究所) 日本の論文・全国の大学図書館の本や雑誌・博士論文など
- ・東京大学史料編纂所データベース 『大日本史料』『大日本古文書』は国会 DC から閲覧可能
- ・史料所在情報データベース (国文学研究資料館) ※公立・私立の大学などの図書館は問い合わせ必要
- ・史料情報共有化データベース (同上) ※公立図書館は原則として誰でも入館・閲覧可能
- ・国立公文書館デジタルアーカイブ 浅草文庫・内閣文庫の旧蔵本を含む
- ・アジア歴史資料センター (国立公文書館) 明治から第二次世界大戦終戦までの公文書約 217 万件

【付録 2】無料で漢籍 (中国書) の全文検索が可能

- ・漢籍全文資料庫 (国家 (台湾) 図書館中央研究院) 東京大学図書館のポータル・サイトからアクセス
- ・維基文庫自由図書館 (ウィキソース) 以前は旧字体でのみ検索できた 最近では未確認

【付録 3】無料でスマホにダウンロードして利用できる「くずし字認識アプリ」

- ・みを (miwo) (人文学オープンデータ共同利用センター) 未確認 スマホ, タブレットで写真撮影